

僕はうすく開くまぶたから、ここが病院のベッドであることを意識しはじめた。いまは早朝なのか、カーテンにうつすらと明るみが透けている。僕は深呼吸して病院の人工的な空気を吸い込む。またまぶたが重くなってきた。僕の腕に点滴針が刺されている。チューブにおちるしずくを見ていると、隣のベッドに人が寝ていることに気がついた。

カノが音もなく眠っている。よかつた。僕はゆつくりとまぶたを閉じた。

真つ暗な夢の中になると、僕はカノの声に起こされた。

「こんなもの、食べられるか!」

隣のベッドでプラスチックの食器が床に散らばる音がした。再び同じ声の怒鳴り声が聞こえた。「私になんの注射をした。言え!」

僕は働かない頭で、まるでテレビを見ているような感覚でぼんやり目に映る光景を見ていた。「何度も説明をしたはずですよ」

「こここの看護婦はみな同じことを繰り返すのね。よく訓練されたものだ」

「……食事、用意しなお願いしますね」

僕は再びまどろみの中に身をゆだねた。

「お目覚めですか」若い看護婦はにつこりと笑って再びカルテに記入を始めた。「いまは……」

僕が何とは無しにそう言うと言看護婦は手首の内側に巻かれている小さな女性用腕時計を見た。「正午です。お水は飲みますか?」

看護婦に頷き、僕は上半身を起こした。隣のベッドはアイロンがかけられた洗い立てのシーツが敷かれていた。

「さあ、どうぞ」と、看護婦はグラスに注いだ水を僕の口元に近づけた。

僕は苦笑いをして自分で飲むことを伝え、看護婦の手からグラスを受け取った。常温の水はあまりうまいとは言えなかった。

「隣のベッドで寝ていた人は?」

窓を開ける看護婦は揺れるカーテンを窓の縁に結わえながら言った。「昨日のお昼に退院されました。お二人とも飛行機乗りだそうですね」

「誰からそれを?」

「その患者さんから……」看護婦は何かを思い出すように首を傾げると、カルテで口元を隠し

て笑った。「私にはそれしか教えてくれませんでしたけど」

「彼女がどこへ行ったか知っていますか？」

「私にはそれしか教えてくれませんでした」

看護婦は僕の手からコップを抜き取り、ベッドに横になるように言った。彼女は僕の肩を抱きかかえ、そつと枕に頭を寝かす。自分の後頭部に違和感を感じ、手を伸ばすとガーゼと包帯が巻かれていた。

「安心してくださいね」と、看護婦はかけ布団を僕の肩までもってきて言った。「傷跡はほとんど残りませんから」

僕は自分の傷より、カノのことが気になっていた。

「彼女の」僕は言ってから、看護婦の口が開くより先に首を振った。「あなたは何も知らされていない。そうですね？」

「はい」看護婦の微笑みは変わらなかった。「そうですね」

カノが爆発に巻き込まれていたとしたら、いったいどれほどの傷を負ったか。僕は想像するだけで身の毛がよだつた。

カノのベッドをはさんで、僕は外の景色を眺めていた。病院の庭で看護士が車いすを押している姿や木の陰に座っておしゃべりをする患者とその恋人が見えた。

病室の扉が横にスライドして開いた。

「起きてるのか、リユーノスケ？」

先生がずかずかとカノと僕の病室に足を踏み入れてきた。

「煙草、ありますか？」

「我慢しろ」先生は折り畳まれたパイプイスをひろげ、座った。「奇跡の生還者だつてな」

「誰がです？」

「馬鹿。お前だよ。ステルスのキャノピーに穴があいている上に、羽に二三ミリの弾を四発。

おまけに尾翼が片方無くなっていた」

「ステルスの性能に感謝します」

「何はともあれ、よくやってくれた」

差し出された手は僕の手をつかみ、力強く握った。

「連邦もこれで少しはおとなしくなる。戦いの舞台は空から机の上に移され、俺たちの……少し違うな……、連邦加盟国と非加盟国の闘争は一応の終結だ。やつらだつて細った石油で食いつなぐのも限界にきている。意地をはろうにもその元気は残されちゃいないだろう」

「隕石が降りしきる空にロケットなんて、土台無理な話だつた」

「どうだつたかな」先生は僕の言葉に鼻先でせせら笑った。「だつたら俺たちはこんなにも大変な思いはしていない」

「宇宙は隕石群で断絶されているんじゃないんですか？」

「リューノスケ。お前、ジョージ・ケイリーって男を知っているか？ 人間が鳥のように空を飛ぶのは体形からして不可能だって言われていた時代でそれを覆した男だ。一八世紀の飛行機なんてのはな、鳥のように羽ばたいて人を飛ばそうというのが当たり前だった。だが、こいつは空気より重い飛行機を飛ばすため羽ばたき機ではなく固定翼機の着想を得た。結果、一五三メートルを飛行するグライダーを開発した。要するに、不可能なんて人の心が作り出した壁に過ぎないってことだよ。連邦は本気で隕石の宇宙へ飛び出そうとしていた」

「だから……壊した」

「純粹な気持ちで空を目指すのなら壊しはしない。ただ、やつらは欲に駆られていた。そして俺たちも。冷静になった世論では爆撃はやりすぎってことになっている。連邦も俺たちも、お互いやり直しだな、いろいろと」

「今回の問題が終われば、連邦とともに空を飛べますか」

「そうかもな……」

「もう、撃墜王と戦う必要はないんだ……」 僕はおかしくなった。「なんだか、ついさっきまで、とても大変なことのように思っていたことが、本当は、全くあつけないことだったなんて。もう、なにも思い悩む必要はないんですね……」

僕はいますぐにでもカノに会いたくなかった。このことを報告しようと思った。いつでも会えるようになったんだ。

「先生、撃墜王の居場所を知っていますか？」

「そのことを伝えるのが、俺の……役目だろうな」

翌日僕は先生のバイクを借りた。

信号につまずくこともなく、ハイウェイに乗った僕は一時間程で小規模な空港についた。裏手にまわりバイクをとめて、襟元までしめていたフライトジャケットのジッパーを下げた。

裏手の入り口はスタッフ専用のもので、大きなエントランスもない。荒れたアスファルトからは草が生え、どこか土臭い細った道路の突き当たりまで歩いた。赤さびのついた扉をくぐつて、空港の滑走路へと出る。

広大な敷地に出た僕は太陽の光りに目を細めた。旅客機が飛び交う中、ひとときわ異彩を放ちながら駐機場に止まる迷彩色のドーダーを見つけた。

僕は腕時計を見て、時間を確かめた。

煙草を一服してから、ゆつくりとドーダーに向かって歩いた。ドーダーに延びるタラップは人を待ち受けていた。

風が吹き抜け、僕は吹き込んだ方を向いた。背後の空港建物の扉が開いた。

先生に教えてもらった通りだった。逮捕されたカノは両腕を拘束される形で左右を黒服の警

護官には生まれ、まるで凶悪犯をとりあつかうようにして護送されていた。ドードーに歩み寄る途中で僕の存在に気づき、カノは顔を上げた。

僕は片手を挙げて挨拶をした。カノははにかむように唇を持ち上げると、両脇の男に僕と話を許す許可をもらおうとした。

僕が先生からのお墨付きを警護官に見せると、カノは一時的に解放され、僕の方にひとり歩いてきた。

「傷は？」と、カノは僕の首筋あたりを見た。「ガーゼが少し赤くにじんんでいるわ」

「人の傷口から血は流れるものだよ」

カノの右手に白い包帯が巻かれていた。僕の視線に気がついたのか、カノは右手を後ろにまわして手を組んだ。「私のはたいしたことないの」

「うん……」僕は、動かないその右腕を見て、頷くしかできなかつた。「もういいんだ。もう、君が空を飛ぶ必要なんてない。君は立派に連邦のために飛んでみせた」

カノはふつと僕から視線をはずし、うつむいた。

「私はね、リユーノスケ……」

僕は黙って頷いた。それを見たカノは深呼吸をするように深く息を吸って、ぼそりと小さな声を出した。「もう、空は飛べない」

「うん……」

「リユーノスケが求めた、人間じゃなくなっちゃった」

「もういいんだ。もう、飛ばなくていいんだ。カノ、知っているかい？ 僕らはもう敵じゃないんだ。仲間なんだ」

「うん……。これで、いつでも会えるのね」

「そだよ。もつと喜んでいいんだ。とつても嬉しいことじゃないか」

カノはぎこちなく笑った。なんで、涙を流して笑うのか、僕にはわからなかつた。

「リユーノスケ」

「なに？」

「愛してる」

カノの生気のない右手を見て、僕は涙がこぼれそうになつた。僕はカノの右手を握つた。冷たく、陶器のように細く整った指先が僕の手を握り返した。ほとんどそれは力が入っておらず、まるで子供の握力のように僕の手を包むだけだつた。

黒服の警護官がカノの肩を叩きにきた。僕は握つた手をゆつくりと離し、一步後ろに下がつた。

カノは横に並ぶ警護官を見て、片手で涙を拭つた。「そろそろ連邦に戻るわ。私が内通者でないことも証明しなくちゃならないし」

「君が何もしていないなら、おのずと無実は証明される」

カノは頷き、何かを言いかけると、警護官に肩をつかまれ口を閉ざした。無言のままカノはドードーのタラップへと誘導された。

僕はその後ろ姿を見送った。カノはタラップをあがり、ドードーの搭乗口をくぐった。その時、カノは突然後ろを振り返り、拘束される腕から体を乗り出した。警護官に抑えられるカノは僕に向かって言った。

「ごめん、リユーノスケ……もう会えない！」

警護官に抑え込まれるカノはもがきながら、言った。

「……私は、いつも自分勝手に……わがままで……。もう会えないっていうのに……何にも言葉が浮かばない！ 愛してるって言ったのに、あなたに何にもできない！ ……会えないのは、嫌だよ、リユーノスケ」

ドードーからタラップが外され、搭乗口がしまった。ゆつくりとタービンを回転させながらドードーは滑走路へと移動していく。そよぐ風を正面に、ドードーはエンジンの金属音を響かせ離陸を始めた。重い体で滑走路を駆け抜け、広く大きな翼で風を巻き込み、大空へ飛び立った。濃い青と白い雲が流れる空だった。

新聞に連邦との協議が始まったことが一面に記される中、僕はカノについての記事を探していた。だけれど、今日もそのような記事は載らなかった。多分、この先も載ることはないだろう。

僕は会社のラウンジで、すっかり日課になった朝刊を読む作業を終えた。新聞を折りたたみ、おまけにつけてもらったプリンートのビニールのふたを開き、スプーンですくって食べた。甘いデザートを食べ終わった僕はコーヒーをすすり、ラウンジの窓から都心を見下ろしていた。

「先輩、なに浮かない顔してるんですか？」

エリーゼが僕の隣の席に座ると新聞を手に取り、斜め読みをした。双子はいまだに僕のそばを離れない。ヘンゼルが僕の顔を見ると、ぱちんと指を鳴らした。

「最近、空戦がないからいらだってるんだね。大丈夫ですよ、協議で連邦とどこかの仲がこじれればどちらからか委託がきますって。そしたらまた好きだけ空戦を楽しめますよ」

「そうそう」と、エリーゼは頷いた。「先輩ならスコアを伸ばして、すぐにでもこのトップエースになれるわよ」

僕は笑った。「一人とも何かおこるよ」

「いいの？」と、エリーゼは確信的な笑みを浮かべた。

「そのつもりのかせに」

「先輩、愛してる」

僕はその言葉に胸が締め付けられた。

「……どうかした？」エリーゼが僕の顔を心配そうにのぞき込んだ。

「いや……大丈夫、ありがとう」僕はお礼を言つて、気持ちを落ち着かせた。「少し哀しくなつただけだから」

ラウンジの窓枠が切り取つた空に、一筋の飛行機雲が空を半分にわけていた。